

博物館と資料

海の博物館 石原義剛

0 ; 海の博物館の自己紹介

海の博物館は 1971 年 12 月に開館した民間の財団法人の運営になる博物館で、1973 年に登録博物館になった。現在地へ全面移転したのは 1992 年である。

漁業、漁村の歴史・民俗をテーマにしてスタートしたが、将来、海に関する広い分野に広がることを期待して、「海の博物館」と館名を付けた。

開館を準備中の頃は、水俣病の裁判が進行中であり、資料を求めて漁村を回っていると、どの漁村でも海の汚染と汚染による漁業被害が深刻だった。

それで博物館開館とともに「SOS (save our sea) 運動」をはじめると決めた。

1 ; 海の博物館と資料収集

海の博物館の開館は大阪万国博覧会の翌年であった。全員が若い年代の準備スタッフは意欲満々であったが、万博のエキジビジョン・展示中心に捉われてしまった。結果は大失敗だった。博物館というよりはミニミニ博覧会に過ぎなかった。映像や図像の表現はたくさんあったが、実物による博物館展示はほとんどなかったに等しかった。

入館者も少なく行き詰まっていた時、訪れてくれた民俗学者・宮本常一の助言「なんでもいいから 50000 点集めなさい。なにか見えてくるよ」と云うひと言によって、海の博物館ははじめて博物館としての一步を踏み出した。

さらに 1973 年、主催が博物館協会だったと思うが、ヨーロッパの博物館を見学して回る本格的な視察旅行に参加する機会に恵まれた。この時、ヨーロッパの博物館の資料所蔵点数の量に圧倒された。もちろん国立や財団など財政規模は全く違うが、資料の量が途轍もなく多く、その量が博物館の質までも決めているのを見た。

それから 10 年ほど後、再び博物館ショックを受けたのはアメリカ・ワシントンDC のスミソニアン博物館群の衝撃であった。確か総保有資料点数は数億点（自然史博物館だけでも 1 億 3 千万点）を越えると聞いた。資料点数の数え方には相違があるし、資料点数の多寡が博物館の良否を決めるものではないが、国立科学博物館の 400 万点、国立民族学博物館の民族標本資料点数約 28 万点とくらべる時、余りにも差のあることに気づいた。

海の博物館は 42 年かかってなんとか実物資料（多くは民俗資料）は 5 万点を越え、6 万点に達した。他に約 30 万点の記録資料（古文書、地図、写真、図書など）を収蔵するに至った。宮本常一先生との約束を果たした思いだ。

2 ; 集めなくなった日本の博物館の悲劇

海の博物館が開館したころ、多くの地方市町に小規模な「歴史民俗資料館」が、当時の文化庁の指導で作られて行った。どの資料館にも熱心な館担当者がいて、地方の特色ある伝統産業の遺産や古文書の収集を行っていたものである。それは約 1965（昭和 40）年から 1995（平成 7）年まで 30

年間 のくらいのことであった。現在、地方の歴史民俗資料館の多くが、国から見捨てられる中、辛うじて地域行政やボランティア的の市民の努力で保持されているに過ぎない。

一方、当館もそうであったが、大阪万博以後、高度経済のあだ花のように、地方に陸続と建設された博物館は奇怪な建築を誇る観光施設として脚光を浴びた。しかしそれも一瞬であった。博物館の観光施設化は、実物資料の展示よりもレプリカとバーチャル映像で飾られていた。それは瞬く間にテーマパークに取って代わられた。

そんな中でも博物館は資料だと、いくつかの博物館は実物資料を集めつづけていた。その一つに「みちのく北方漁船博物館」があった。青森市にあり銀行が設立した財団法人によって運営されたこの博物館は、津軽海峡を挟んだ青森と北海道にある木造小型漁船を200隻近くもコレクションしていた。その内の67点は「津軽海峡周辺のムダマハギ型漁船」として国の重要有形民俗文化財に指定されていた。この博物館が本年春、突然解散したのだ。そして重文資料を除く大半の「木造船」資料は処分されてしまった。どう処分されたのか、私は行方を知らないが、この報に接した時、深い怒りと云い知れぬ悲しさに襲われた。

3 ; 博物館学芸員の思い違い

博物館は大学ではない。博物館の学芸員は大学や研究機関の研究者ではない。馬鹿にするな百も承知だ、と叱られるのを承知の上あえて言うが、博物館の仕事は資料の収集と保存そして展示である。その作業を進めるのが学芸員である。

梅棹忠夫さんは「博物館はメディア」である、「博物館は博情館」であるといった。近年それに「博物館は〈体験的〉メディア」という考えが加わったと思うが、基本は変わらない。学芸員は資料の演出家。情報伝達のプロであるが、歴史の研究者が「私は中世を研究しています」と云う「研究」を目的とする仕事ではない。資料を収集し整理し展示に使っているうちに、結果として歴大な量と高度な知識を会得してある分野の第一人者になっている学芸員もいる。しかし、彼は決してその分野の研究者ではないのである。あくまでも博物館資料の専門家なのだ。

4 : 日本の博物館はどこへ行くか

最近、テレビに「お宝番組」が登場して人気を博している。それを見ていると、日本と云う国は随分民間に「お宝」と称する実物資料が存在していることに感心する。時にはそのコレクションを並べて資料館として公開している個人もいる。しかし、そんな潜在力はあるとしても、それは博物館ではない。

日本の博物館は、学校教育における役割を十分果たす環境にない。言葉の上では重要な施設と云われながら、しっかりとした位置付けはされていない。博物館は修学旅行の間に“ちょっと立ち寄る施設”に過ぎない。

基本的な博物館の役目である、資料収集と保存の認識がない。日本の文化の基本資料の保存の意識に欠けているのではないか。現在の博物館は国や行政に見捨てられて漂流する博物館である。